



開かずの
窓

川崎ゆきお

「人が怖い。特に顔が怖い」

「顔ですか」

「表情が一番出るでしょ。顔は」

「どう思っているのか、意志のようなものが顔に出るわけですね」

「コミュニケーションが怖いと言うことでもある」

「確かに人が怖くなることがありますねえ。この人、何を考えているのかと」

「もっとダイレクトな体験を私はした」

「何でしょうか」

「怪談に近いがね」

「幽霊が出ますか」

「出ない」

「どんな体験でしょうか」

「私は庭に面した部屋で過ごしている。猫の額は狭いと言うが、何処が額なのか分からない。しかし、狭い庭だ。小さな建売住宅がびっしりと並んでいる場所でね。隣近所の声がよく聞こえる」

「猫が出てきますか」

「出てこない」

「はい」

「座敷から庭を常に見たいので、ガラス戸のカーテンは開けている。布団に入っても外は見える。さすがに庭は見えないがね。隣の家が見える。空も少しだけ見える」

「覗かれそうですねえ」

「庭の向こう側の家の窓は常にカーテンが閉まっておる。その二階の窓からでは私の居間は見えない。ただ……」

「何か」

「庭の右側に隣の家が迫っておる。こちらのほうが近い。そして窓がある。明かり窓程度のものだがね。小さい。ここは至近距離でね。だから、この窓は常に閉まっておる。カーテンはないが、曇りガラスなので開けないと見えないだろう。引っ越してここに十年ほど住んでいるがね、その窓が開いたのを見たことがない」

「目を合わすからでしょうねえ」

「そうだな。近すぎる。その家は大きな息子がいる。まだ、結婚しておらん」

「はい」

「居間から庭を見ると、自然に窓が目に入るのだが、開くことはないので、壁のようなものだ。だから、気にしたことはない。ただ……」

「ただ？」

「その窓のある部屋はキッチンだろうねえ。音は聞こえないが、間取り的にはそうだ。表から見ると、このキッチンの窓は別にある。かなり大きな。だから、私の居間から見える窓は必要なかったのかもしれない。だから、明かり窓程度に小さい。夏でもこの窓は開かない。風通しで開け

るはずなのだがね。また網戸も入っていない。開けるつもりが最初からないんだ。開けると私の居間が丸見えになる。だから開けないことにしているんだろうねえ」

「どんな夫婦ですか」

「もう一人息子がいたようで、もう孫がいる。私との関係は普通だ。お隣さんだからね。挨拶程度はする。それ以上親しくはないが、互いに笑顔で挨拶をするよ。特に問題はない」

「はい」

「これは怪談ではない。しかし、それに近い」

「何か異変があったのですね」

「朝、私は結構早く起きる。起きるとテレビを付け、食事をする。左側に庭を見ながらね」

「はい」

「顔だ」

「顔」

「視線ですぐに分かった。あの窓に顔」

「はい」

「横の家の奥さんが笑っている」

「それは……」

「笑顔で私をじっと見ているのだ。私は茶碗を落とした」

「開いたことのない窓でしょ」

「開いているだけでも驚くが、そこに人の顔。顔だけでも驚くが笑ってこちらを見ている」

「それは怖いです」

「私は驚いて、隣の部屋へ逃げたよ」

「何だったのですか」

「戻ってくると、窓はもう閉まっていた」

「それは、何でしょう」

「今でも分からない。笑っていたのか泣いていたのかも、今となっては分からない。似たような表情になるからねえ」

「夫婦げんかでもしたのでしょうか」

「分からない。私を脅かそうとしてやったとは思えない」

「その後、どうなりました」

「何もなし。その奥さんと顔を合わせても、いつも通りだ」

「はい」

「それは一年前の話だ。その後、窓は開かない」

「何だったのでしょうかねえ」

「分からない」

